

令和4年度 江戸川区立大杉第二小学校 学校関係者評価 中間評価用報告書

学校教育目標	○ よく考え すすんで学ぶ子 ○ 思いやりのある子 ○ 明るく 元気な子 「学校大好き、先生大好き、友達大好き」 豊かな心、確かな学力、一人一人が輝く杉二の子	目指す学校像 目指す児童像 目指す教師像	○「温かい心(敬愛・思いやり・感謝)」「確かな学力」「地域への貢献性」を育てる学校 ○よく聞き、見、話し合い、体験を生かして考える子。互いを尊重し、物や自然を大切にする子。心身ともにたくましく、めあてをもってねばり強くやりとげる子。 ○児童・保護者・地域の人々、社会、自然とのかかわりの中で、様々な課題に気付く教職員。課題を解決するために、主体的に考え、新たな発想を生み出すことのできる教職員。考えや発想を適時に実践に移すとともに、自己評価を適切に行い研鑽する教職員。
前年度までの学校経営上の成果と課題	<成果>児童一人一人の学習の進捗状況を把握したことにより、手立てを明確にし、対応をすることができた。 <課題>新学習指導要領を踏まえ、各教科における指導法について研究し、授業力をさらに高めていく必要がある。		

教育委員会重点課題	取組項目	評価の視点	具体的な取組	数値目標	自己評価			学校関係者評価		年度末に向けた改善策
					取組	成果	成果と課題	評価	コメント	
いきいきと学ぶ学校づくり	確かな学力の向上	「確かな学力向上推進プラン」の実施・改善や補習の実施などによる指導の充実と授業力の向上	ベーシックドリルの全員実施、eライブラリーの活用、9月から補習を各学級で実施	各学年ベーシックドリル平均正答率70%	B	B	「確かな学力向上推進プラン」に基づき具体的な取組みを行った。ベーシックドリルの全員実施、eライブラリーの活用、5月からの補習といった取組みを行い、確実に学力を高めることができたことが成果である。一方、ベーシックドリルの数値目標を達成できた学年が一つもなかったことが課題としてあげられる。現在の取組を継続しつつ、授業内容を充実させ、数値目標達成できるようにする必要がある。	B	授業における教材・教具の工夫や学力向上担当教員の配置ができています。区の放課後補習及び学校独自の第1学年を対象とした放課後補習を実施し、区及び学校全体で学力の底上げに取り組みることができています。	ベーシックドリルを学期の始めと終わりに取り組み、課題の克服を目指すなど、反復練習すること数値目標を達成できるようにする。タブレット端末を今まで以上に効果的に活用し、学びの質を高めていく。
	体力の向上	体育の授業や休み時間における主体的な運動の実施による運動意欲の向上	朝マラソン週4回実施、運動遊び年間計画の実施	・休み時間の外遊び、90%の児童が参加 ・長なわ跳び(8の字跳び)への全校児童の参加	B	B	具体的な取組み目標は確実に実施できた。さらに、休み時間には教員が運動啓発のために児童と共に休み時間に遊ぶ機会を作り、主体的に遊ぶため意欲を喚起することができた。	B	体育の授業や朝マラソン、休み時間の外遊び等を感染症防止対策を講じながら行うことができていた。休み時間に先生が積極的に子供たちと校庭で遊ぶことができていた。	区のガイドラインを踏まえ、必要に応じて感染症対策を講じながら、体力向上に向けた取り組みを実施していく。教員の体育実技研修会を意図的・計画的に実施するなど、体力向上に向けて教員の指導力を高めるとともに発達段階を踏まえた系統的な指導を学校全体で取り組むことができるようにしていく。
	読書科の更なる充実	学校図書館の整備・活用の推進や探究的な学習の充実	週2回の朝読書の実施 1300分の読書 ビブリオバトルの全校実施	1、2年生は年間60冊、3年生以上は年間1万ページの読書	B	A	具体的な取組み目標に加えて、図書館の利用法の見直し、蔵書の充実、新しい読書カード等の読書科の充実を図るための様々な取組みを行った。	B	図書室のレイアウトが変わるとともに推薦図書の表紙のディスプレイが掲示してあるなど、読書活動を推進するための工夫がよく見られた。	図書支援員や図書ボランティアの方々と連携・協力しながら、読書環境を充実させていく。読書週間の機会を活用し、委員会活動の中で、推薦図書にある料理を給食のメニューに加えるなど、幅広い教育活動を展開して読書活動を推進していく。
	外国語教育の推進	授業力の向上とALTの効果的な活用	外国語研修の実施、年間を通したALTの計画的な活用	年間の外国語授業、中学年35回、高学年70回	B	A	教科担任制の導入や、「外国語」で学習した内容を「学習発表会」で発表する等の活動を行うなど、当初計画していた内容よりも充実した活動を行うことができたことが成果としてあげられる。	A	感染症対策を講じながら、友達とコミュニケーションを図る活動を工夫していた。	情報化推進リーダーを中心としてタブレット端末を活用した外国語活動の授業を参考にして、各学級の授業の質を高めていく。外国語担当教員を中心とした研修会を開催し、教員の指導力を向上させていく。
特別支援教育の推進	共生社会の実現に向けた教育の推進	・エンカレッジルームを活用している児童への個に応じた指導の充実 ・副籍交流及び共同学習の充実	・特別支援教室個別支援評価シートを活用した情報共有及び指導・支援の充実 ・コロナ禍における鹿本学園との複雑交流の継続	・学習と行動のチェックリストの実施把握項目である「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論」「姿勢・粗大運動」「微細運動」「注意」「行動」「感情のコントロール」「社会性」を卒業時に各項目達成度B80～60%以上を目指す。 ・交流の仕方は適宜検討しながら年間1回以上の交流実施	B	B	・特別支援教室の保護者面談や学習の記録で、各家庭と継続的に情報共有を図り、児童の実態に合わせた指導内容の精選を図っている。 ・各児童に応じた複雑交流を行っている。	B	個に応じた学習指導が必要な児童に対し、多様なニーズに合わせて指導を工夫することができた。鹿本学園と連携・協力して、交流について話し合うことができていた。	校内研修を設定し、個に応じた指導方法について共有することで、学校として統一した指導を行えるようにする。
	子供たちの健全育成	・全教員による情報共有	・特別支援全体会の学期ごと年間3回の実施 ・連絡会毎週(木)による情報共有	・教室外での個別対応児童の復帰を目指す。(別室対応児童前年度比50%) ・連絡会での各学年年間5回以上の報告	B	B	・特別支援全体会を通して、校内などの教職員も各学年の児童の様子を把握できるようにしている。 ・連絡会では、より迅速な情報共有をすることができている。	B	発達に課題のある児童に寄り添うため、担任に加え、介助員や専門員、SC等が連携・協力して教育活動を進めていた。	生活指導全体会(9年間)を1回増やすことで、より一層各学年の配慮児童を共通理解するとともにSCや特別支援教室専門員等の意見も取り入れて指導方法等を随時更新し、個に応じた指導を行っていく。
学校と家庭、地域、関係機関との連携強化	学校関係者評価の充実	教育活動の改善・充実に向けた学校関係者評価の実施・改善	・年間3回の学校評議委員会における情報共有及び教育活動の改善・充実	最終評価でAを80%以上とする。	B	B	・1学期の学校評議委員会において情報共有及び教育活動の改善・充実を行った。	B	学校経営方針の説明を受け、教育活動の説明を聞き、理解することができた。併せて、授業を参観することができ、学校の教育活動の理解が深まった。	日常の教育活動のみならず学習発表会等の感想及びご意見をいただき、今後の教育活動に活かしていく。
	学校と地域との連携	見守り隊及びふれあいWDを通した交流活動の実施	・見守り隊の実施 ・ふれあいWDの実施	・見守り隊の年間27回の実施 ・ふれあいWDの年間11回の実施	B	B	・見守り隊の人数が減少しているので、再度募集を行った。また、都の委嘱を受ける讀渡式を行った。 ・ふれあいWDは感染症拡大のため現在中止している。状況が改善し次第、再開する。	A	感染症拡大防止の観点から、ふれあいウエンスディは中止となったが、見守り隊は実施できている。学校応援団として東京都教育委員会から取組の成果に対して感謝状をもらえることになった。	見守り隊(五木町会4・5丁目)の再募集をするなど、今後も児童の見守り活動を充実させていく。ふれあいウエンスディ等の活動についても社会情勢を踏まえ、可能な限り実施していく。
特色ある教育の展開	「学校における働き方改革プラン」	・教科担任制の実施 ・学年だよりの行事予定の一括作成	・第6学年における学期ごとの実施 ・教務主任による学年だよりの行事予定作成	教員の残業時間が月45時間以内とする。	B	B	働き方改革の推進として、夏季水泳の縮小・会議の精選・4h活用による、連絡会時間の短縮化等を行うことで、教材研究等の時間を確保しつつ、残業時間を減らしている。	B	働き方改革により、夏季水泳指導を実施しなかったことで働き方改革を促している。児童の学びを深めるための準備に時間を使えるように仕事を精選できるとよい。	教育活動を見直し、より効果的な実施策を検討することで働き方改革をしていく。併せて、OJTを推進し、教員の負担感を軽減するとともに指導力を向上させていく。
	小中連携教育の推進	「小中連携教育構想」及び「各教科等の連携教育プログラム」による連携の充実	・「小中連携スタンダード」の徹底 ・「連携教育プログラム」に基づいた指導の在り方の検討	・生活リズムチェックの取組を長期休業明けに全校実施 ・児童前回比10ポイント上昇 ・全教科で「連携プログラム」の改善を図る。	B	B	「連携プログラム」を改善するために全体的に見直しを図った。また、中止していた小中での授業参観を部分的に再開できるように計画した。	B	コロナ禍で実施できなかった小中連携事業が再開でき、授業参観の一部開始できたことは大きな教育効果があると考える。一部統括、社会情勢を踏まえて、推進していったほしい。	各小中学校で連携・協力し、可能な限り、お互いの授業を参観できるよう調整をしていく。小学校において、体育大会前に中学校の教員が指導に加わるなど、小中連携事業としてできない教育効果のある活動を計画・実施していく。